

アンドレイ・モナストウイルスキイとコンセプチュアリズム

鈴木正美

★略歴など

詩人、作家、アーティスト、パフォーマー、コンセプチュアリズムの理論家。1949年ムルマンスク州に生まれる。モスクワ大学人文学部卒業。1970年代初めから「二本足の友人のために」(1972)のように、言葉の響きとイメージの連鎖による実験的な詩を書く。1973年の詩では、類似する響きの単語を一語ずつ並べ、一つの要素を徐々にずらし、ねじまげ、逸脱させていく「エレメント詩」(モナストウイルスキイ自身による用語)を書く(「冷淡な／タカ派／私はなぜ／投げ捨てたのか／優しい／唇／雪の／灌木を／／すべては私の中／静寂の中の／道／遠くの／驚／ゆがんだ／柱／／そして私たちは生きている／深く／そして私たちは縫う／広く／全てはただ／なくなり／話すことも／許されない／／私はどこ？／荒天の中／人生の／終わりに／音楽は／終わり／舌は／もつれる」)。同年の「点描コンポジション」では、詩の朗読とともに友人(画家)が即興で描く、詩と絵のコラボレーション(パフォーマンス)を行う。1976年、芸術家の友人たちとのパフォーマンス・グループ「集団行為」を始める。「モスクワ・コンセプチュアリストのサークルにとってそれはテキストから出来事への美学的関心の転換を意味した。グループが形成され、この非象徴的でデメタフォリックな(脱隠喩的)美学への移行がモナストウイルスキイの『行為の詩学』の対象の中で生じた。美学的理解と検討の対象として単なる響き(『号砲』)やあるいは板から板へ糸を巻き直す時間(『巻き取り機』)等が提示された。(『もうひとつの芸術』1991年)

「集団行為」のパフォーマンスは1986年まで続き、その膨大な記録である『郊外への旅』(1998)やコンセプチュアリズムの芸術家たちの言動をまとめた『モスクワ・コンセプチュアル派の用語辞典』(1999)も出版された。また牛の角をつけた珍妙なビデオ作品や詩集『パガンへの道すがら、天へ向けてとんがった小屋へ』(2001)など現在もモナストウイルスキイの活動は盛んである。

「モスクワ・アート・マガジン」(2002年、第42号)では75ページにわたってモナストウイルスキイの特集を組み、多方面から彼の活動を評価、分析している。「80年代の閉塞的、自閉的状況の中でさえ、あからさまに権利要求する訳でもないが、アクチュアルな活動の場を同じくしていた」(プリゴフ「モノ・ステレオ・ストウイルスキイ」)、その場を作り続けたモナストウイルスキイへの今日の評価はたいへん高い。ロシアを離れて、西側に活動の拠点を移してしまったカバコフはロシアの芸術家たちにとって「導きの星」となったが、美術研究者ジョーゴチの言うように、最近のカバコフ作品が「ソビエト」の「商業主義化」と結びついているのとは反対に、モナストウイルスキイの芸術はその「詩化」と結びついている。「それゆえ彼は今もロシア現代美術の真の英雄であり続けているのだ」。

★ ミニマリズムとコンセプチュアリズム

エカテリーナ・ジョーゴチは『20世紀のロシア美術』(2002)の「ヴィジュアル詩とパフォーマンスにおけるミニマリズム」の章でレフ・ルビンシテインとドミトリー・プリゴフの詩、ゲルロビン夫妻と「集団行為」のパフォーマンスについて同列に論じている。モナストウイルスキイの「エレメント詩」は視覚や聴覚から意味と時間をはぎとり、単なる対象として言葉を最小限の要素に還元するミニマリズムの試みだという。こうした試みはホーリンやサトゥノフスキイ等リアノゾヴォ派の詩人たちも行っていたが、モナストウイルスキイのミニマリズムの端緒になったのは音楽からのアプローチ、すなわちジョン・ケージからの影響と関係がある。

ロシアのミニマリズムのもう一つの発端はテリー・ライリーのようだ。ミニマル・ミュージックの先駆的作品であるライリーの『インC』は1964年に作曲されたが、数年後にはエディソン・デニーソフがLPをロシアに持ち込み、音楽家たちの間ですぐに知られるようになった。そのLPはアレクセイ・リュビーモフ(ピアノ)の手に渡り、その結果1969年にはモスクワ民衆芸術会館で初演されるに至った。この時の演奏をシュニトケやグバイドゥーリナも聞きにきていたという。このリュビーモフによってジョン・ケージの作品『4分33秒』がロシアで初めて演奏(1977)されている。モナストウイルスキイはこの作品の影響の下に長詩「私は音を聴く」を書いた。

(前略)

アレクセイエフは自作の絵『私は音を聴く』を読む。

同席している芸術家、作家、

作曲家たちはその音を

理解しようと努力し、耳をそばだてる　そして静寂の中に
彼らの心臓の音が脈打つのを聴いた。

アレクセイ・リュビーモフはケージの『4分33秒』を実演した。

演奏のあいだ聴衆は全員

沈黙し　音を聴いた。

その音がなんなのか　まだ分からなかったが、彼らは
すでにすべてを聴いていた。

(中略)

スムニンは自作のエレメント詩第5「私は音を聴く」を読んだ。

朗読の場にいたのは、詩人、画家、音楽家たちだけだった。

朗読の跡、参加者全員が作家のコンセプトに賛同し、言った。

彼らもまた音を聴いたのだと。

★「集団行為」のパフォーマンス

パフォーマンス・グループ「集団行為」はアンドレイ・モナストイルスキイを中心に、ゲオルギイ・キゼバリテル（1955—）、ニキータ・アレクセーエフ（1953—）、イーゴリ・マカレーヴィチ（1943—）等、10名前後のメンバーで構成されている。さらにこれにイリヤ・カバコフをはじめとする芸術家、ボリス・グロイス、ミハイル・ルイクリンなどの評論家や哲学者が行為者または観客として多数参加している。彼らの活動の全貌は『郊外への旅』（1998）に収められている。

彼らがパフォーマンスをするのはいつもモスクワ郊外の森や野原に恵まれた公園である。「脱都会性」を意識した彼らの行為はまず、招待状が届き、パフォーマンスの日時、場所が知られるところから始まる。その日に向けて観客はさまざまな思いにふける。そして当日、モスクワから郊外のパフォーマンスの場に向かう列車の中で観客も行為者も心の準備をする。表現行為に参加するための儀式という訳か。都会の汚れた空気から自然へという移動行為は、受動的態度から自発的参加へという個人の内的変異となる。さて肝心の現場に到着すると…。その中からいくつかを紹介する。

リブリフ（1976）

冬の野原の雪の下から不思議な電子音が聞こえてきて、行為者も観客も全員帰ってしまうまで音が鳴り続けている。

スローガン 1977（1977）

丘の上の木と木の上に渡された10メートルの赤い布に「私はここに一度も来たことがないし、この場所のことは何も知らないにもかかわらず、私には何の不満もないし、私は何もかも気に入っている」という文句が書かれている。

行為の時間（1978）

7キロメートルもの長いロープが森の中から現れて、野原を横切り、延々と引っ張られていく。森の中からラッパの音が聞こえてきたり、奇妙なオブジェに向かって行為者が走っていたりと、訳がわからない。なんの説明もなされないまま、なんの意味も見いだせないままである。ただ重々しい空虚だけが最後に残る。

出現（1976）

ある日、一通の招待状が届く。モスクワ郊外へ向かう鉄道サビョーロフスカヤ線に載って、指定された駅で降りること。近くの野原で芸術行為が行われるので是非ご覧下さいとある。30名の招待客が集ったら、野原の際の特定の場所に立たせる。5分後に野原の向こうの森の中から二人の行為者が現れ、野原を横切り、観客たちのところまで来ると、「出現」に立ち合ったことを証明する資料（「証拠文書」）を手渡す。

第3ヴァリエント（1978）

森に囲まれた広い野原のまんなかに30メートルの間隔で二つの等身大の浅い穴が掘られている。森の中から紫色の布を纏った人物が歩いてくる。彼は穴に近づき、中

に横たわる。そして3分間じっとしている。静寂。これは「空虚なアクション」と名づけられている。これが終わると彼はまた森の中へ戻っていく。と同時に二つ目の穴から最初の人物と同じ格好をしたもう一人の人物が立ち上がる。彼の頭はオレンジ色の風船でできている。手に持っている杖で彼は風船を割る。すると白い塵にまみれた頭が現れる。彼は再び穴に横たわる。静寂。彼は横たわったままだ。この状態は観客が飽きて全員帰ってしまうまで続く。こうしてパフォーマンスは完結する。空虚、何もない状態を行為者と観客がともに感じる事が、このパフォーマンスの目的らしい。

停留所 (1983)

行為「停留所」がジョン・ケージの「4分33秒」の大きな影響を受けていることは確かである。30人の観客がソコリニキ公園の並木道を歩く。観客に気づかれないように80メートル後方から二人の行為者がついてくる。停留所まで4分という場所で、先導者が立ち止まり、テープレコーダーでの録音を始める。あらかじめ用意した行為についての説明文を読み、「停留所。1983年2月6日12時56分」と最後に言う。そして観客たちに、後方からやってくる行為者への注意をうながす。行為者が近くまでたどりつき、観客と挨拶を交わすまでの時間が「行為」の時間である。終了後テープを巻き戻し、全員で録音を聞く。そして行為に参加したことを証明するメモが入った封筒が参加者全員に手渡される。4分33秒の間に生じたさまざまな音（周囲の音、参加者の身体と行為がもたらした音）を意識的に聞き、現象と空についての思索へと誘うパフォーマンスである。

★仏教、空、コンセプチュアリズム

彼らのパフォーマンスがきわめて儀式的であることはジョーゴチも指摘している。そこにはシャーマニズムからの影響も見られるだろう。この儀式性はケージの音楽からその音楽性をはぎとり、ステージの場（「演奏」空間、会場の中と外の環境音、音と人の風景）全体を儀式の場ととらえ、その場にあわせた人々の集団的身体とその行為すべてを「空」と位置づけようとしているかのようである。こうした儀式性、集団的身体、空といった概念は仏教、特に禅からの影響を受けていることはジョン・ケージが媒介者のひとつとなったことから明らかである。

ロシアの現代美術、特にモスクワ・コンセプチュアリズムの根本となる思想には仏教の影響が強く見られる。特にロシア語でプスタ（空虚）と呼ばれている概念が重要であることは、周知の通りだが、それは仏教思想の根本原理である空（くう）と密接につながっている。モナストウイルスキイ編『モスクワ・コンセプチュアル派の用語辞典』（1999）における編者の補遺には「シュニャータ」の項がある。「シュニャータ」とはサンスクリット語で空（くう）のことだ。サリニコフの指摘によると、1970年代に東洋美術に関する研究は知識人にとってはポピュラーなものであり、空の概念についても中国の水墨画やジョン・ケージの音楽哲学とともに知られていた。『ダンマパタ』や『金剛般若経』、ガンジーの『我が生涯』が、サリンジャー、ヒッピー、ビートルズ同様に語られていた。

禅の「公案」はグループ・ミチキのシンカリョーフの小説にも活かされているよう

に、1970年代の若手芸術家の間では重要なコンセプトとなっていたのである。公案は言語による思弁的理解を乗り越え、他者との身体的行為による関係性を解体、再構築するものにとらえ、実際の「行為」を通じて参加者全員が思惟を重ねることが「集団行為」の目的だったようだ。それが本来の公案のあり方と根本的に違うのは、行為の事後に繰り返される言葉による哲学であることだろう。身体と行為そのものをいかに言語化するか、ここにもロシア特有のロゴセントリズムが表れているとも言える。

コンセプチュアリズムの芸術家たちにとって、アートの作品となるべきモノや対象となる事物は必要ない。言葉さえあればいいのである。その言葉がただの現象にすぎない以上、最終的に形成される作品も行為も空にすぎないことは言うまでもない。

★作品リスト

Монастырский Андрей (1949—)

詩集

Небесному носатому домику по пути в Паган. — М.: ОГИ, 2001. — 88 с. Стихи 1972—1973 гг.

雑誌掲載作品

Ковчег, № 4 (1979), с.79-80.

Элементарная поэзия (поэтические объекты 1975—1978) // *Akzente*, № 3 (1982).

Иголь Макаревич // *А-Я*, № 3 (1981).

О прозе Сорокина // *Литературное А-Я*, № 1 (1985).

Тексты из большого чтения (1972—1973): Аттракцион. На пляже. Отдых. Марианнина музыка // *Черновик*, № 1 (весна 1989).

Черновик, № 2 (осень 1989). Проза.

Черновик, № 5 (1991). Стихи.

Способ стиля // *Черновик*, № 8 (1993), с.104-106. Эссе.

文集・アンソロジー等収録作品

Элементарная поэзия (поэтические объекты 1981—1983) // *Kulturpalast*. На кассете — стихи в авторском исполнении.

Я слышу звуки // *Moskau*. — S-Press, 1987.

Антология русского верлибра. /Сост. Карен Джангиров. — М.: Прометей, 1991. с.370.

Я слышу звуки // *Самиздат века.* /Сост. А.И.Стреляный, Г.В.Сапгир, В.С.Бахтин, Н.Г.Ордынский. — Минск-М.: Полифакт, 1997.с.580-582.

На пляже // *Жужукины дети, или Притча о недостойном соседе.* Антология короткого рассказа. Россия, 2-я половина XX века. /Сост. А.Кудрявицкий. — М.: НЛО, 2000. с.335-336.

Точка зрения, Визуальная поэзия: 90-е годы. /Сост. и общ. ред. Дм.Булатова. — Калининград, 1998. с.373-376.

単行本

Поездки за город. Группа "Коллективные действия". — М.: Ad Marginem, 1998.
Инструкции, документация, воспоминания участников, теоретические трактаты.
А также литературное произведение самого Монастырского — "Каширское шоссе".

Словарь терминов московской концептуальной школы / Составитель и автор
предисл. Андрей Монастырский. — М.: Ad Marginem, 1999.

Web サイト

ヴァヴィロン <http://www.vavilon.ru/texts/monastyrsky0.html>

非公式詩 <http://www.rvb.ru/np/publication/01text/33/01monastyrsky.htm>

Словарь терминов московской концептуальной школы

<http://www.philosophy.ru/edu/ref/concept/>

その他

Художественный журнал (Moscow Art Magazine) №42 (2002) モナストウイルスキ
イ特集号

鈴木正美「ソビエト・アート・ナウ」他 井桁貞義編『ソビエト・カルチャー・ウォッチ
ング』（窓社、1991年）所収

鈴木正美「モスクワ・コンセプチュアリズムの美術」平成8年度冬季研究報告会報告集—
—スラブ・ユーラシアの変動、その社会・文化的諸相、p. 314-p. 325、北海道大学スラブ研
究センター 文部省重点領域研究「スラブ・ユーラシアの変動」事務局、1997年6月

鈴木正美「言葉と行為のはざままで——〈集団行為〉のドキュメント集『郊外への旅』」ユ
リイカ 1998年8月号

鈴木正美「障害としての芸術」望月哲男他編著『現代ロシア文化』（国書刊行会、2000
年）所収

鈴木正美「コンセプチュアリズムと空——アンドレイ・モナストウイルスキイ」ユリイカ
2003年5月号